

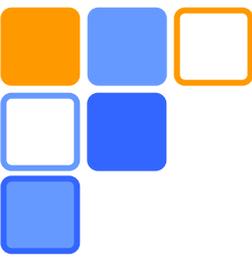
イギリスの大学における 成績評価の内部質保証制度

A decorative graphic consisting of seven squares arranged in a 3x3 grid. The top-left square is orange with a white border. The middle row has two blue squares. The bottom row has an orange square, a white square with a blue border, and a blue square.

2012年6月2日(土)

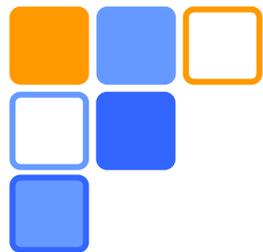
日本高等教育学会第15回大会

田中正弘(弘前大学)

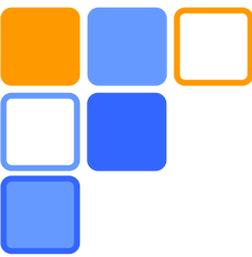


目次

- 本発表の目的
- イギリスの成績評価質保証制度
- オックスフォード大学のカリキュラム
- 考察(日本との比較)
- まとめ(日本への示唆)

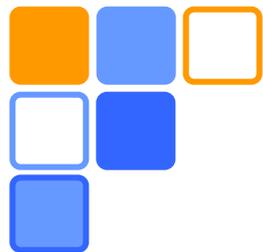


本発表の目的

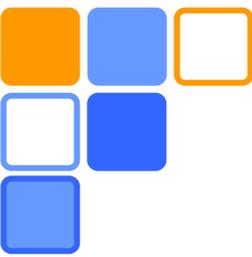


本発表の目的

- 我が国では、成績評価は各大学教員の裁量に委ねられているため、評価基準が不統一、かつ曖昧であることが多い。
- 成績評価の信用度が低いままでは、個々の学生の「学習到達度」(学士力)を可視化したとしても、社会の信頼を得られない。
- そこで、イギリスの例を参考に、科目の到達度を適切に設定・評価するために必要な、自律的な内部質保証(信用される成績評価)制度の構築、およびその環境整備を提案したい。

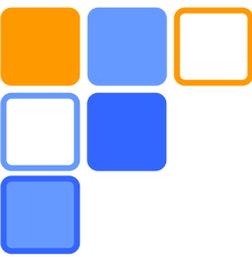


イギリスの成績評価質保証制度



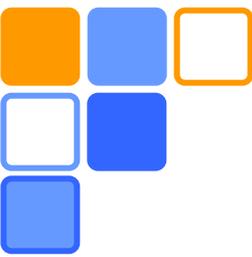
成績評価基準の策定

- 教育プログラムの学習到達目標は、「プログラム詳述書」(programme specifications)に記載される。
- このプログラム詳述書の作成は、一般的に各大学の学科会議で行われている。日本においても、三つのポリシー(DP, CP, AP)の作成は学部教授会などで実施されているので大差はない。
- ただし、イギリスの大学では、学士課程全体の学習到達目標だけでなく、**各科目の到達目標(成績評価基準＋読書課題)**も、学科会議で協議・決定している。
 - － 試験規則(Examination Regulations)として、科目の成績評価基準を公表(学内)している。



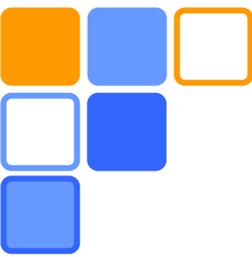
成績評価のダブルチェック

- 成績評価基準を学科の教員で共有しているため、授業実施，試験作成，成績評価が異なる教員であっても支障がない。
 - 期末考査の採点結果に個人的恣意を挿めないように、答案の採点と成績評価は必ず2名の教員が実施する約束となっていて、その2名とも授業担当者ではないことの方が一般的である。
 - 学生への評価結果が2名の教員の間で異なる場合は、3人目の教員が「裁判官」(adjudicator)として決断を下すことになっている。



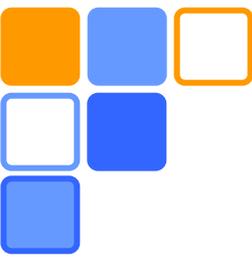
組織的な事後チェック

- イギリスの大学では、教育内容・水準と成績評価の妥当性を、下記の方法で組織的にチェックしている。
 - A) 学科単位で毎年行う「モニタリング」(Regular Monitoring or Annual Reviews)
 - B) 全学単位で5～6年ごとに実施する「レビュー」(Periodic Reviews)
- モニタリングでは、特に下記の点が注視される。
 - A) 試験の評価方法に変更を加える場合
 - B) 試験の内容に変更を加える場合
 - C) 試験結果の全体的水準や、時系列変化などを確認する場合
 - D) 試験の慣習・過程・規則に変更を加える場合



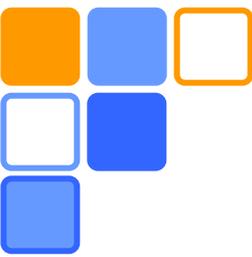
バーミンガム大学のモニタリング

- バーミンガム大学のモニタリングでは、学士課程における**全ての科目**が点検の対象となる。
- この点検は、科目の担当教員が作成した報告書を基に、その科目が属する教育プログラムの統括者（通常は学科長）などが実施する。
- 報告書に記載される内容は、下記の通りである。
 - A) 受講学生数
 - B) 学生の学習到達度（特に成績分布の時系列変化）
 - C) 学生や第三者などの意見に対する対応
 - D) 優れた取組の検証
 - E) 具体的な改善点のリスト



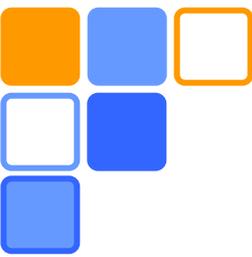
第三者の参画

- イギリスの大学には、学外の教員が教育内容・水準と成績評価の妥当性を検証し、その改善に向けた助言を行う、「学外試験委員」(External Examiner)制度がある。
- 具体的には、以下の三つの内容を含む。
 - A) 教育内容・水準は、学習到達目標や分野別参照基準と照らし合わせて、相応であるか。
 - B) 学生の学習到達度は、他の大学と同等といえるか。
 - C) 試験と評価は適切かつ公正に行われたか。



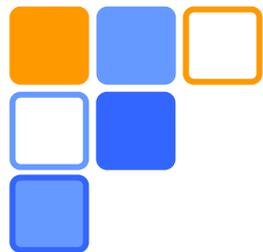
学外試験委員の助言の重み

- 学外試験委員は監査を依頼された**全ての科目の全ての答案用紙**に目を通し、その採点結果と成績評価の妥当性を判断する。
 - 特に、最も上位の成績である「第一位」(first)と「第二位上級」(upper second), および最も下位の成績である「可」(pass)と「不可」(fail)の境界線近くの採点がなされた答案用紙は、注意深く審査する決まりになっている。
- 仮に学外試験委員が科目の成績評価結果に疑義があると報告した場合は、その評価結果の見直しを学科会議で審議しなければならない。そして評価結果は実際に改められることが多い。

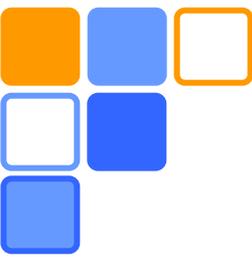


素朴な疑問

- イギリスの大学では、なぜ、**全ての科目**における成績評価の基準策定や結果分析を、組織的に（第三者も参画して）実施できるのか？
 - 日本では教員負担が重すぎて到底無理だと思われる。
- その答えとして、下記の事実も考えられる。
 - A) 日本と比べて、科目や試験の数がとても少ないため。
- そこで発表者はイギリスの大学のカリキュラムに着目し、オックスフォード大学の事例を調査した。ここで、その成果を紹介したい。

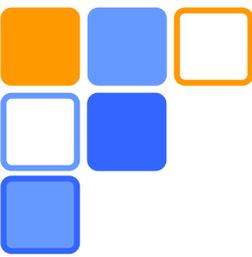


オックスフォード大学のカリキュラム



学期の構成

- オックスフォード大学は、他のイギリスの大学と同様に、3学期(Term)制になっている。
 - Michaelmas(秋学期), Hilary(冬学期), Trinity(春学期)
(2学期制の大学も増えてきた)
- 学期は8週間で構成されていて、試験勉強・実施期間も含まれることがある。
 - 年間24週の授業期間は、世界的に最も短いといわれる。
- 科目によっては、特に自然科学系では、**週3回計24回**の授業を行うものもあれば、**週1回計2回**しか授業を行わないものもある。
 - このように開講回数に大きな幅があるのは、後述するように、「科目」(module)ではなく、類似の科目を集めた「モジュール」(subject)の単位でプログラムが編成されているためである。

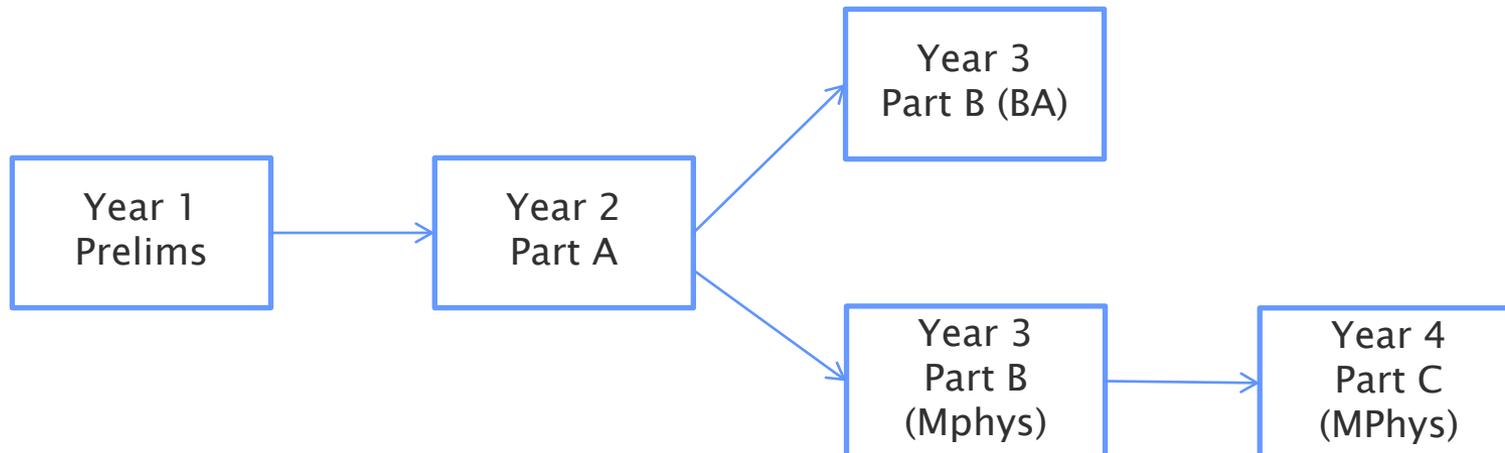


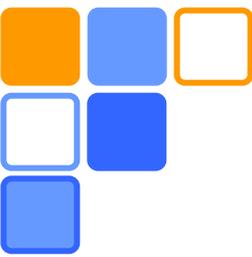
期末考査の構成

- 期末考査は、1年目の春学期末に行う「第一全体試験」(First Public Examination)と、3年目の春学期末に行う「第二全体試験」(Second Public Examination)の2種類がある。
 - 自然科学系では、第二全体試験の一部を2年目の春学期末に前倒しで実施することもある。
- オックスフォードなどイギリスの大学は、日本の大学のように、各科目で独自に試験を行うのではなく、モジュールで統一して実施するために、試験の数は日本と比べて**圧倒的に少ない**。
 - ただし、試験時間は長く、一つの試験で約3時間となっている。
- 多くのプログラムで、卒業論文(または研究レポート)の提出が義務づけられている。

カリキュラムの例 (物理プログラム)

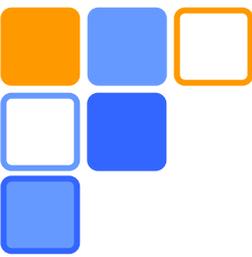
- 「物理」(Physics)プログラムは、その他のプログラムと同様に、二つの学習段階に区別されている。
- 第一段階は、1年目の「予備試験」(Preliminary Examination: Prelims) コースで、第二段階は、2年目以降の「最終優等試験」(Final Honour School: FHS) コースである。
- なお、物理では、3年目に「学士」(BA in Physics)と「修士」(Master of Physics)の二つの課程に分岐する。





Prelimsのカリキュラム

- Prelimsコースでは、下記の四つのモジュールが必修となっている。
 - A) 「物理1」(Physics 1: CP1)
 - B) 「物理2」(Physics 2: CP2)
 - C) 「数理科学1」(Mathematical Methods 1: CP3)
 - D) 「数理科学2」(Mathematical Methods 1: CP4)
- 選択科目は、下記から一科目を履修する。
 - A) 「複素関数」(Functions of a Complex Variable)
 - B) 「宇宙物理学」(Astrophysics)
 - C) 「量子の概念」(Quantum Ideas)
- 加えて、計15日の実験が課せられる。
- チュートリアルも週一回程度実施する。

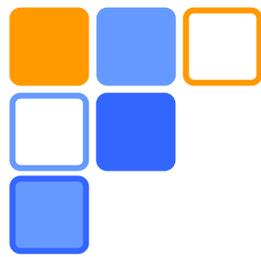


Prelimsの履修表(秋学期)

□ 秋学期

1	2	3	4	5	6	7	8	No. of Lecs
[CP1: Mechanics -----]								8
			[CP1: Special Relativity -----]					10
				[CP2: Circuit Theory -----]				10
[CP2: Optics -----]								6
[CP3: Vectors and Matrices -----]								18
		[CP3: ODEs and Complex Numbers -----]						10
[CP4: Calculus -----]								11
[Physics Today & Extras -----]								14

週三回の(こともある)科目がある。

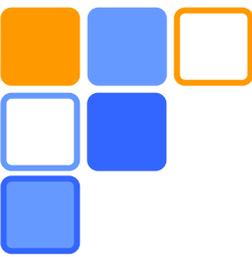


Prelimsの履修表(冬学期)

□ 冬学期

1	2	3	4	5	6	7	8	No. of Lecs
[CP1: Mechanics -----]								20
[CP2: Electromagnetism -----]								20
							[CP2: Optics --]	4
		[CP3: V&M ----]						2
[CP4: Multiple Int/Vector Calc -----]								14
[CP4: Normal Modes and Wave Motion -----]								12
[Extras -----]								11

力学など、秋学期からの通期科目がある。

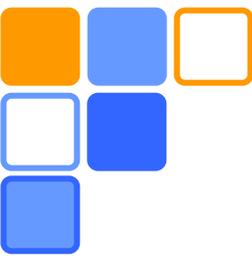


Prelimsの履修表(春学期)

□ 春学期

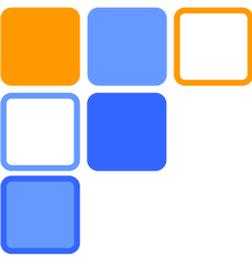
1	2	3	4	5	6	7	8	No. of Lecs
[CP1: Revision -]						The First Public Examination		4
		[CP2: Revision -]						4
[CP3: Revision -]								4
		[CP4: Revision -]						4
[SO1: Functions of Complex Variable]								12
[SO2: Astrophysics -----]								12
[SO3: Quantum Ideas -----]								12

試験対策のための復習(revision)と選択科目の履修が中心となる。
5~8週は試験勉強・実施期間になっている。



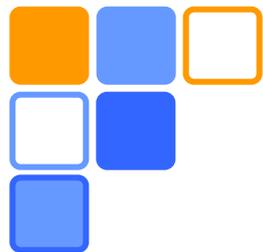
FHSのカリキュラム(1)

- 2年目のFHSコース(Part A)は三つのモジュールが必修となっている。
 - A) 「熱力学」(Thermal Physics)
 - B) 「電磁気学と光学」(Electromagnetism and Optics)
 - C) 「量子力学」(Quantum Physics)
- Prelimsコースと同様に, 選択科目と実験, およびチュートリアルも課せられている。
- 3年目に修士課程に進む条件は, 2年目の春学期末に行われる第二全体試験の一部で, 第二位上級以上の成績を得ること。
- モジュールの試験時間は, それぞれ3時間である。

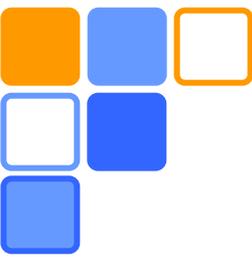


FHSのカリキュラム(2)

- 3年目のFHSコース(Part B)は三つのモジュールが必修となっていて、それぞれのモジュールは二つの科目で構成されている。
- 学士課程と修士課程の学生は、同一のモジュールで学習する(教員の負担軽減)。
 - ただし、学士課程の3年目の第二全体試験(Part B)では、試験時間が半分の1時間30分で、負担は軽減されている。
- 学士課程の学生は、冬学期の5～8週で実施する、卒業研究のレポート提出(期限:春学期のはじめ)が義務づけられている。
 - 卒業研究は、2～4名のグループで行われる。

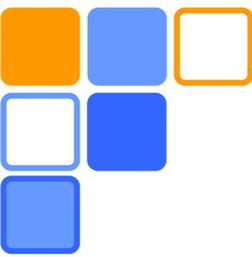


考察(日本との比較)



考察(1)

- 科目ではなく、類似の科目を集めたモジュールの単位でプログラムを編成するメリット：
 - A) 試験の回数が少なくて済むので、成績評価に関わる質保証の手間を軽減できる。このため、**丁寧な事後チェック**が可能となる。
 - 物理プログラム(学士課程)では、必修のモジュールが計10回、選択科目が計3回、実験(計3回)と卒業研究という、合計17回の試験を受けることになる。
 - 人文社会系のプログラムでは、10のモジュールと卒業研究という、合計11回の試験で済むことが多い。ただし、選択型のモジュールの数は多い。
 - 自由選択科目は少なく、教養科目は皆無に等しい。
 - 日本は4年間で70回程度の試験を受ける。その上、選択科目が多いために、試験の総数は膨大になる。



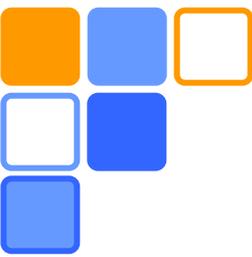
考察(2)

- B) 各科目の学習時間を(日本の大学ように)横並びで計15回などに統一する必要がなく, 学生に期待する**学習到達目標と照合し, 適切な学習時間に調整**することができる。

(適切な成績評価の前提となる質保証への試み)

- 日本的な教員主体の考え方(科目にポストが与えられる)の場合, 科目の重要性は等しく, 全科目を週1回計15回に統一した方が自然である。
- 学生主体の考え方では, 重要かつ難解で分量がある分野では, 週3回計24回の科目を提供する必要があると判断できる。または, ある分野の一部分の学習で十分とすれば, 週1回計2回の科目で足りるだろう。同様に, モジュールの授業時間の合計も統一する必要がないといえる。

(単位制度の運用も柔軟化する必要がある。)

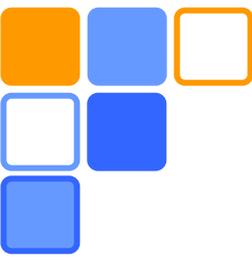


考察(3)

C) 試験勉強のための時間を十分確保できる。

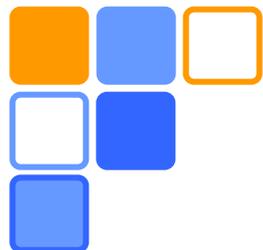
(適切な成績評価の前提となる質保証への試み)

- イギリスの大学では、試験を実施する学期の最後の4週間程度を、試験勉強・実施期間に設定することが多い。
 - 欧州単位互換制度 (European Credit Transfer and Accumulation System: ECTS) でも、試験勉強(+試験)の時間を単位の計算に組み込んでいる。
- 日本の大学では、15週の授業終了直後に15科目程度の試験が実施されるため、厳格な成績評価を行うのは酷ともいえる。

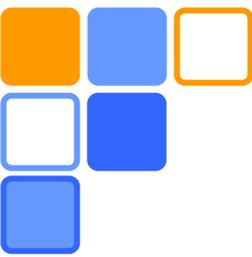


考察(4)

- 科目ではなく、類似の科目を集めたモジュールの単位でプログラムを編成するデメリット：
 - A) 成績が不可になった場合の再履修が困難である。
 - オックスブリッジでは、不可の評価を受ける学生の割合は、概ね2%以下である。
 - B) カリキュラムの編成が困難である。
 - イギリスの大学では、科目数が少ないために、開始時期や開講回数が異なる科目を組み合わせたモジュールを複数必修化しても、カリキュラムを比較的容易に編成できる。
 - C) 短期間で受け入れる留学生に成績を与えるのは、困難である。
 - 最短でも1年間の履修を要求するシステムになっている。

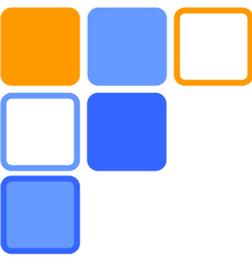


まとめ(日本への示唆)



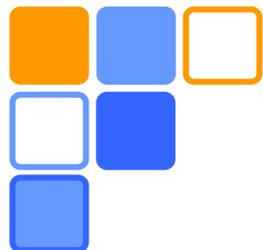
まとめ(1)

- イギリスの大学は、成績評価に関わる自律的な内部質保証として、
 - 各学科の教員間の共通理解の下、共同で全科目の**成績評価基準を策定**し、試験規則として公表している。
 - 全科目の成績評価結果について、評価基準に則した適正な評価がなされているかを、モニタリングやレビューの形で、**組織的な事後チェック**を行っている。
 - 成績評価の通用性を高める策として、当該教員以外の**第三者の参画**を求める、学外試験委員制度を活用している。



まとめ(2)

- イギリスの大学で、成績評価の基準策定や結果分析を第三者も交えて組織的に実施できる理由の一つは、日本と比較して、科目や試験の数がとても少ないことにある。
 - 特に試験の数が目立って少ないのは、科目ではなく、類似の科目を集めたモジュールの単位で、教育プログラムが編成されているためである。
- 従って、日本の大学においては、科目と試験の数を減らす工夫が必要だろう。



ご静聴ありがとうございました。

田中正弘(弘前大学21世紀教育センター—
高等教育研究開発室)